

「後期松前氏時代」について(7)

安政元年(1854)3

月に締結した神奈川条約(日米和親条約)では、幕府は開港場を長崎一港に限ろうとしましたが、ペリーは、長崎は航路に当たらないので神奈川か浦賀にして欲しいとし、これに琉球と松前を加えた三港の開港を要求しました。

しかし、交渉の結果、松前の代わりに箱館を、浦賀の代わりに下田を開くことになり、二港の開港の時期については、下田は直ちに、箱館は翌安政2年3月からと決まりました。

幕府は、嘉永2年(1849)7月に、異国の境にある松前藩主松前崇廣と、長崎・五島列島の福江藩主五島盛成に、要害の場所であるので城主となることを許し、海防に力を入れるよう命じ、福山城は安政元年10月に完成しました。

箱館庄司山への移転案

築城の幕命を受けた松前家17世藩主松前崇廣は、直ちに松前に報知しますが、その文中に「東にて搗ぎ立てそめし白餅を堅く備えんふる里の神」と詠み、築城の決意を伝えたとされています。

築城設計については、高崎藩の儒学者であり、兵学にも通じた市川一学に依頼するため、高崎藩主松平輝聰に要請し、許可を受けました。

嘉永3年(1850)3月に一学は息子の十郎を伴って松前に渡り、道南の和入地全体を調査し、その結果、箱館背後の庄司山辺りを最良の地としました。しかし、松前藩は、松前にある福山館を改修し、海防のための砲台を備えたものにしたいたとして、幕府に裁決を求めたところ、福山館を拡張し防御を補強すること

に決定しました。

福山城の築城

改修工事は、福山館の不要部分の撤去から開始され、嘉永3年6月には築城掛の人事として、松前内蔵廣当が総奉行となりました。用材はヒバ材とし、檜山地方から、また、松前周辺からも栗や桂が伐り出されました。

さらに、石垣石は神明の沢の標高60〜120m付近に露頭する、空隙が多く比重の軽い緑色凝灰岩が切り出され、大石垣石は冬に橇で引き出されました。そして、礎石・土台石・敷石などは、本御影石を瀬戸内から移入しました。

建築費用の捻出については、場所請負人と呼ばれ、松前藩士の経営する商場で、アイ又交易を全て請け負った商人から多額の献金をさせ、家臣からも俸禄の一分を献上させ、さらに町屋町民からも応分の負担を求めたとされています。

築城に要した経費は、献

金と増税を合わせると、15〜20万両に達したとされ、安政元年(1854)には、総奉行を下国安芸崇教とし、その年の9月に完成し、10月24日には幕府目付堀織部正利熙らが松前に来て検分(見分)しました。

7基の台場と二重構造の天守台石垣

福山城を最も特徴付ける施設として、大砲を据えるための台場があります。全

国的に見ても、日本式城郭に台場が付いた城は、唯一福山城のみで、三ノ丸南面から東面にかけて7基の台場が設けられました。また、天守台については、天守の一層目の壁を支える土台石垣の外側に、さらにもう一重石垣を築いています。特に南東隅はこの城で最大の石垣石を据えて、天守の土台を一層堅固なものにしています。

